

2012年1月9日(月曜日)



平成24年の新春を迎え、西川知事と芥川賞作家の津村節子さんが、ふるさと福井について語りました。



作家 津村 節子さん

1928年、福井市生まれ。10歳で東京へ転居。1965年「玩具」で芥川賞、1990年「流星雨」で女流文学賞、1998年「智恵子飛ぶ」で芸術選奨文部大臣賞を受賞。昨年、「異郷」で川端康成文学賞、「紅梅」で菊池寛賞を受賞。



ふるさと福井を舞台にした5つの作品

— 津村さんは、昨年4月に小説「異郷」で第37回川端康成文学賞を、また10月に小説「紅梅」で第59回菊池寛賞を受賞されました。2つの賞を受賞されたお気持ちをお聞かせください。

**津村** 川端康成文学賞は短編小説に贈られる唯一の賞です。長い間同人雑誌に短編を書き続けてきた私にとってはあこがれの賞でしたので、とてもうれしかったです。

また、菊池寛賞は文化活動の分野で功労のあった人に与えられる賞ですので、私に何の功労があったのかなと少し意外な気がしました。夫で作家の吉村昭が「戦艦武蔵」や「関東大震災」でいわゆる記録文学を確立し、同じ賞を受賞しましたので、夫婦での初めての受賞となりました。

**知事** 津村さんには「福井ふるさと大使」として、ふるさとを思い、福井のことを書いていただいている、大変頼もしい限りです。

今回の立派な賞の受賞、本当におめでとうございます。福井県の誇りです。

**津村** 福井県には小説の材料がたくさんあり、特に伝統工芸という点では非常に優れたものがあります。日本六古窯に数えられる越前焼を「炎の舞い」で書きましたし、千年以上の歴史を誇る越前和紙も「花がたみ」で書きました。

また、春江の絹織物を「絹扇」で書きました。大正時代の春江は絹織物の県内最大の生産地で、私が子どものころには福井県の絹織物が日本経済を支える柱の一つと教わりました。これも私の自慢の種です。

— 石田縞(じま)を復元する「遅咲きの梅」と若狭の歌人・山川登美子を書いた「白百合の崖(きし)」を含め、「ふるさと5部作」と呼ばれていますが、主人公はすべて芯の強い女性ですね。

**津村** 気候に恵まれないだけに、福井県の女の人は芯が強いと思います。「柳に雪折れなし」といいますが、しなるだけじゃなくて、折れない。私が魅力を感じるの、こうした芯の強さです。何があっても挫折しない、めげない、努力を惜しまないところ

が福井県の女の人の魅力ですので、こうした女性たちを主人公に書きました。

— 津村さんをはじめとして、福井県からはたくさん作家が出ていますね。

**知事** 芥川賞作家や直木賞作家の数は、人口を考えると非常に多い県です。歴史的に見ても、中野重治さんや高見順さんという素晴らしい作家がいますし、江戸時代には 江出身で東洋・日本のシェークスピアといわれた近松門左衛門、幕末には正岡子規が万葉・実朝以来の歌人と褒めている橘曙覧もいます。こうした素晴らしい作家を輩出している県ですので、これからも福井県の文学風土をうまく育てていくことが大事だと思います。

— 福井県ゆかりの作家の作品に親しめる施設として県立図書館がありますね。

**知事** 県立図書館の入館者数、貸出冊数は、人口当たりで日本一です。1日に平均2000人が利用しています。平成18年からは津村さんをはじめとする郷土の作家のコーナーも設けています。昨年10月には津村さんに寄贈いただいた直筆原稿も展示し、県民の皆さんに楽しんでいただきました。今後は、図書館内に文学館をつくれなにかと検討しています。

— 津村さんの随筆集「風花の街から」の「風花」を冠した「ふくい風花随筆文学賞」には、高校生の部もあるそうですね。

**津村** 高校生のころから物事をどのように見て、感じて、表現するかを勉強してもらいたいと思い、高校生の部を設けてもらいました。物を書こうと思ったら、何を書くかを考えなければいけません。そして、テーマが決まったら、どのように構成していくかを考え、自分の主張したいことをみんなが読んで分かるように表現しなければなりません。物を書くというのはとてもいい勉強になります。

また、入賞する作品は、人と人とのつながりが重要なテーマになっています。親子や友人、師弟といった人間関係の中で、非常に感銘を受けた先生がいたり、友情に厚い友達がいたり、それからとても陰湿な関係だったのがうまくいくようになりたり。感受性の強い若い時に、そのような体験をするのは大事なことだと思います。

— 人のつながりを重視している福井県が、昨年「都道府県の幸福度調査」で全国1位になりました。また、ブータンの国王夫妻が来日された際には、西川知事もお会いしたそうですね。

**知事** ブータンは世界一幸せな国といわれ、本物の豊かさを求めている国です。福井県と人口がそれほど変わりませんし、ともに伝統や文化を大事にしていますので、これからも仲良くしていきたいと思います。

また、津村さんには、ふるさと納税などを通じてふるさと福井をいつも思っていていただいていますし、非常においしいミディマト「越のルビー」の名付け親でもあります。津村さんは辰年生まれだそうですが、この辰年にちなんで福井の恐竜ブランドをさらに売り出していきたいと思います。

## 今年の抱負

— 最後に、今年の抱負についてお聞かせください。

**津村** 小説というのは、体力と知力の両方がないと書けません。私は「紅梅」で最後の一滴まで絞り出してしまっていて、もう小説を書く気力は残っていないのですが、作家にとっては書くことが生きることですから、これからも私の心の琴線に触れるようなテーマが見つければ、それに全力投球をしたいと思います。

**知事** 津村さんには福井県のことをたくさん書いていただいています。もっと書いていただきたいと思います。

今年は、日本で一番古い歴史書「古事記」が編さんされてちょうど1300年に当たります。古事記の中には、福井県の氣比神宮や越前がにも登場しますので、奈良県や島根県などと連携して、文学や歴史、伝統などを中心に盛り上げていきたいですね。

また、長浜から敦賀までの鉄道が開通して130年という記念すべき年でもありますので、地域と結び付きながら観光やブランドについてもどんどん盛り上げていきたいと考えています。



にしきわ いっせい  
福井県知事 西川 一誠



菊池寛賞受賞を記念し、  
県立図書館に特設コーナーを設置

 **BACK**